

氏 名（国籍）	い 李	すん 承	しん 信（韓 国）
学 位 の 種 類	博	士（学 術）	
学 位 記 番 号	博 甲 第 3584 号		
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	文芸・言語研究科		
学 位 論 文 題 目	大正期〈恋愛〉表象の領分 －セクシュアリティ・ジェンダー・植民地－		
主 査	筑波大学教授	博士（文学）	荒 木 正 純
副 査	筑波大学教授		新 保 邦 寛
副 査	筑波大学助教授	博士（文学）	吉 原 ゆかり
副 査	筑波大学教授		増 成 隆 士
副 査	帝京大学文学部教授		池 内 輝 雄

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、大正期の〈恋愛〉現象に焦点を当て、文学テキストだけでなく、〈恋愛〉をめぐる批評的テキスト群を言説資料とし、その現象を横断的に捉え直そうとしたものであり、この〈恋愛〉表象が、セクシュアリティ・ジェンダー・植民地という問題系とどのように関わっているかを考察している。本論文の構成は、以下のとおり。

### 第 1 部 大正期の〈恋愛〉論の領域

#### 第 1 章 「文化現象」としての有島武郎の〈死〉

#### 第 2 章 〈恋愛〉ブームの時代

#### 第 3 章 厨川白村『近代の恋愛観』の受容

### 第 2 部 〈恋愛〉ブームの前景

#### 第 4 章 〈墮落女学生／女先生〉の表象

#### 第 5 章 『或る女』における〈恋愛〉のありよう

#### 第 6 章 〈少年愛〉と〈暴力〉のまなざし

#### 第 7 章 〈恋愛〉における理想と現実

#### 結 章

先行研究を概括し、本論文の目的と問題設定、さらにはその特徴をのべた序章のあと、第 1 章は、有島武郎の情死事件をめぐるメディア報道を検討し、その〈死〉がもたらした社会的反響を具体的に示している。先行研究が、この情死を文学者・有島武郎の〈死〉として捉え、〈恋愛〉の視点を欠いていたのにたいし、当時のメディア報道は、その〈死〉を〈恋愛〉の枠組みで表象する傾向にあったと論証している。その傾向は、とりわけ女性読者層に顕著に見られ、有島の〈死〉の表象は、空前の〈恋愛〉ブーム時代を背景にしているとも指摘している。

第 2 章は、従来、具体的検討がほとんどなされなかった厨川白村『近代の恋愛観』を分析・検討し、大正期の〈恋愛論〉の様相を析出している。この本のベストセラー化の経緯から、〈恋愛〉表象の磁場の変容を

明らかにするとともに、この本が、「新理想主義」に基づく生活革新思想の一面をもったこと、さらに白村の〈恋愛論〉が、明治期の〈両性問題〉の議論を受け継ぎ、新しい意匠で再構築されたものとしている。

第3章は、『近代の恋愛観』のベストセラー化の経緯を分析し、その背景には、出版ジャーナリズムの隆盛と厨川白村自身の〈戦略〉の要因があったことを析出し、さらにはこの本が中国や韓国でも受容された経緯を明らかにしている。

第4章は、従来、翻案として研究対象にされなかった内田魯庵の「女先生」を、セクシュアリティとジェンダーの観点から分析し、この作品が、当時の〈墮落女学生〉問題を素材としつつ、他の〈墮落女学生〉小説群とは一線を画し、〈墮落女学生〉言説のアンティテーゼとして機能していることを明らかにしている。またそこには、婚姻と直結しない男女関係を、国家権力を侵犯するものとして断罪するイデオロギー体制も表象されているとしている。

第5章は、有島武郎『或る女』に現れた時代状況（明治30年代中頃）、たとえば〈渡米〉ブームや良妻賢母主義の再編といった現象をめぐり考察し、『或る女』の〈渡米〉問題では、男女のジェンダー間に異なる意味のあったことを指摘し、葉子には海外脱出願望が見られるという。さらに、こうした〈渡米〉が、「擲身報国」の道になりえた時代のイデオロギー体制を浮き彫りにしている。

第6章は、日本「内地」で韓国人が書いた「日本語」小説の最初期の作品、李光洙の「愛か」と、彼の同級生であった山崎俊夫の「耶蘇降誕祭前夜」とを比較検討し、そこに共有される〈少年愛〉のモチーフを析出するとともに、「耶蘇降誕祭前夜」は「愛か」をプレテクストとしているとしている。従来、ほぼ無視されてきたこの二作品には、植民地知識人・李光洙の表象が見られること、さらにそこには、帝国主義と同性愛嫌悪の二重の〈暴力〉的まなざしがあることを検証している。

第7章は、韓国『毎日申報』に連載され、韓国近代文学の嚆矢と評価される李光洙の『無情』を対象に、この作品は、李が2度目の日本留学の際に書いた作品がもとになっており、明治期の〈恋愛観〉だけでなく、大正期初期に現象した〈恋愛観〉のパラダイムがコラージュ的に見られるとしている。そして、この『無情』が、「近代」思想としての〈恋愛〉を表現し、大衆教化を意図した「啓蒙」小説であるとしている。

結章は、第7章までの議論を概括し、これからの展望を示している。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、膨大な資料や先行研究を十分に読み込み、従来の研究に新知見を加え、研究の新領域を開拓したきわめてすぐれた論文で、以下の三つの成果が指摘できる。

従来、〈恋愛〉をめぐる先行論では、主として明治期西欧から受容された〈恋愛〉概念が、どのように伝統的概念の〈色〉や〈恋〉に代わっていきかが追究されてきた。しかし著者は、〈恋愛〉概念が大正期に普及することに着眼し、明治期の文学作品を時系列にたどるだけではその実態が把握できないと考え、明治期西欧からもたらされた〈恋愛〉観がいかに大正期の思想と交渉し、どのように変容したかを明らかにしようとした。具体的には、文学作品だけでなく、同時代に大量に生産された〈恋愛論〉言説群を〈恋愛〉概念の磁場と設定し、大正期に現象した〈恋愛〉表象を吟味している。まず、ここに本論文の独創がある。

本論文の独創の二つ目は、大正期の「恋愛論は一過性のブームで終わってしまった」とする先行研究にたいし、帝国日本内地の〈恋愛論〉は「終わってしまった」可能性はあるとしても、ひとたび帝国全体に視野を広げれば、大正期の〈恋愛〉ブームはけっして終息を迎えてはいなかったとし、研究の射程を旧植民地にまで広げたことにある。たとえば、日本統治下の韓国では、大正期の〈恋愛〉ブームがつづいていたことを、当時の韓国『新東亜』の記事などを手がかりに論証している。

第三の独創は、大正期、「宗主国」日本と「植民地」朝鮮において、〈同性愛〉がどのように両地域の相互

交渉現象としてあったかを、日本内地に留学し作家として出発した李光洙を事例にとり考察していることである。従来のジェンダー論的研究枠にゲイ・レズビアン研究枠を加えた本論文は、この分野の最初期の成果であり、大正期日本文化の研究にとどまらず、1920年代前半の韓国文化の研究にも貢献するものである。

以上のように本論文は、文献を博搜し、十分に位置づけや価値づけをおこなった、独創的な研究であるが、欠点がないわけではない。たとえば、第2章は大正期の恋愛観を総合的に把握しようとした労作ではあっても、この問題をめぐる堺利彦ら社会主義者の戦略的取り組みが考慮されていない。また、第2部で取り上げられた李光洙の二作品の論考は、論文全体の構成からすると恣意的であるという印象は払拭できない。〈恋愛〉概念の多様性の示唆はできても、第1部で展開された異性愛言説の議論とうまくかみ合っていないのである。とはいえ、本論文のとりわけすぐれた成果は、皮肉なことに、韓国人という著者の特性をいかした第2部の第6章と第7章に見られ、李光洙の同性愛言説をつきとめ、それと韓国での恋愛ブームを日本文学・文化研究の土俵に導入したことである。今後の類似の研究は、本論文が開拓したこの領域を視野にいれざるをえなくなった。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。